

《下崎神社》



安産の神として、訪れる人は絶えない下崎神社

現在、下崎部落は岡豊町小籠部落の中に含まれている。ここには有名な安産の神様である下崎神社があるが、長宗我部元親のころは地帳帳を見ると下崎寺があり、寺領をかなり持っていたことが明らかである。その由来は、次の伝承に基づくといい。

長宗我部の末期、ある領主が小籠付近で猪をして猪を獲た。早速

家来に命じて、下崎寺の境内でこれを料理したところ、下崎寺の住職が、「お寺の境内で血を流すとはもつての外だ」と、鋭く抗議をして武士たちをしかりとばした。領主は大いに怒り、住職をとらえて寺の庭にひきすえ、桶をかぶせて石で重しをして放置してしまっ

た。

夜になって、近所の女房がひそかに食事を運び、住職をなぐさめ、早く逃げるようにとすすめたのであった。しかし住職は「自分は逃げようとは思わぬ。何事も因果であり、運命である。その方の親切

は身にしてみても忘れ得ない。何でも望む事があれば、仏の名においてかなえてやろう」と言ったところ、女房は「女の大役であるお産が、無事に苦痛なく行われるならこれにこした喜びはありません」と希望を述べた。住職はその願いをか

なえてやろうと言つて、間もなく処刑されたのだった。やがてこの住職の霊を付近の人々が祭るようになり、ここに安産の神として下崎寺が誕生した。そして明治になって名前を下崎神社と変え、現在に至っている。

我々の少年時代を顧みるに、今日とは比較にならないほど貧しい衣・食・住の中で、随分いたずらもしたことがあるが、なぜか今日のような非行という言葉にもならず、社会問題にも至らず、なんとか「わりことし」という言葉で済まされる程度のものであった。

かたがたが、我々と同じ戦後派ではなからうか。「人間の進化」つまり過去に現在の経験を加味したものを未来に送る、という道理からすれば、今の彼らは勉学の時間も多く、新しい知識を学び、両親たちよりはるかに優秀な素地を備えている反面、非行の芽も背筋を寒くするほどの成長性のあるものを兼ね備えていると見るべきではなからうか。

私は先生がたの助手として少年剣道に携わる者であるが、ご父兄の中には「子どもが剣道を始めたので、次の目からは模範的な良い子どもに成っている」とような錯覚を起すかたがいないでもない。剣道は自ら学び取り、その一つ一つを積み重ねていくものである。そこには礼節があり、忍耐があり、修練がある。ちなみに、道徳教育を始めたからといって、即成果を望むのは愚かである。

少年非行に思うこと

人間の教育、つまり道徳教育に尽きるのではなからうか。我々の時代のそれは幸いなことに各家庭の父兄をはじめ、学校の教師、近所のかたたちなど、周囲のすべての人がその教育を受けた人たちがかりであり、なんとか見よう見まねではあるが、人間的な面目を保てたのではなからうか。

つまり、環境なり、物の道理から判断すれば、非行は決して不思議なことではない。突発的なものでもなければ、偶然でもない、当然そう成るべくして成っているのである。これは非行の低年齢化という事実を見ても証明されることである。

今こそ、国を挙げての道徳教育に真剣に取り組むべきではなからうか。戦後四十年近くを経て今日の惨状である。一朝一夕にはいれない。最短距離で、今の幼児たちが中学生として成長した十年後であらうし、さらに確かなことは、その中学生たちが父となり母となった時であらう。それまでの向う二十年間の妙薬をどう調合していくのか、その工夫がこれまた難問ではある。

大和田太船(田村乙)